

東日本大震災による水産業の被災実態と復興の足がかり

高知県須崎市野見湾におけるカンパチ養殖業の津波被害状況

青野 怜史

高知県水産振興部中央漁業指導所

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震の津波により、震源から遠く離れた高知県でも県中部の養殖施設を中心に大きな被害を受けました。ここでは、県内全域の被害の概要を述べるとともに、特に被害が大きかった野見湾のカンパチ養殖業の状況について報告します。

震災により、高知県では中部の香南市から西部の四万十市にかけて、養殖生産物および施設を中心に26億円超の被害がありました。市町村別にみると、香南市ではヒオウギガイやブリ養殖で0.06億円、土佐市ではカンパチやシマアジ養殖で1.02億円、黒潮町ではカツオの活餌が0.04億円、四万十市では四万十川下流のアオサ養殖で1.31億円の被害がありました。とりわけ、筆者の担当地域である須崎市では、須崎港で西日本最大の3m前後の津波が観測され、養殖生産地である浦ノ内湾および野見湾で24億円という甚大な被害をうけました。特に被害が大きかった野見湾では、カンパチ養殖業を中心に22億円超（養殖小割1.28億円、養殖魚20.58億円、養殖用共同利用施設など0.59億円）の被害となりました。野見湾では、平成22年のチリ地震津波でも県内で唯一、養殖魚の被害が確認されており、本県ではめずらしいリアス式の海岸地形が遠方で発生した地震による津波の影響を受けやすくしていることがうかがえました。

野見湾のカンパチ養殖業の被害状況について養殖業者からの聞き取りをもとに報告すると、野見湾沿岸の野見、大谷地区では、地震発生後に津波警報が発令され、サイレンが鳴り響きました。養殖業者の多くは漁船に乗り込み、漁港から5～10分程度の養殖小割に向かいました。養殖業者は、魚の入った10～11m四方の養殖小割4～6基を沖に向かい漁船で牽引したり、既存の漁場で小割と漁船をロープで連結するなど、津波の到来に向けて作業を行いました。

11日17時頃、津波第1波が野見湾に到達し、2波、3波と、その勢いは増していきました。養殖業者は、潮の流れに向かってエンジンを全開で小割生簀を牽引しましたが、船と養殖小割は何メートルも先まで瞬く間に流されました。そして、連結した4～6基の養殖小割の中ほどに位置する小割は、両側からの力に耐えきれずに

立ち上がり、ミシミシという音を立てながら大破していききました。漁場では、養殖小割が入り乱れ、漁船も1隻転覆するなど、壮絶な状況は12日明け方まで続きました。

大津波警報が解除された12日の昼、筆者は被害調査で現地を訪れました。漁場には大破した養殖小割が漂い



図1 津波により大破した10.5m四方のカンパチ養殖用木製小割筏
野見湾馬の背漁場にて撮影。



図2 津波により大破した11m四方の金枠小割筏
野見湾ガラク漁場にて撮影。



図3 津波により大破したカンパチ養殖用木製小割及び化繊網
大谷漁港にて撮影。



図4 津波によって小割網がふきあげられ、体表にスレを呈した養殖カンパチの斃死魚
野見湾ガラク漁場にて撮影。

(図1, 2), カンパチ養殖が行われていた野見湾ガラク漁場には、従前には整然と並べられていた養殖小割の姿はなくなっていました。漁港では、不眠不休で作業を行う漁業者の姿があり、小割筏の残骸や破れた小割網が引き上げられていました(図3)。養殖魚の多くは破れた網から逃げ出し、小割網の中に残った魚でも網がふき上げられたことで体表が擦れて出血した斃死魚がみられました(図4)。体表が擦れたことで、津波発生直後には一見無事にみられた養殖魚でも被害がみられ、漁協の死魚保管庫には毎日のように大量の斃死魚が運び込まれました。このように、津波発生後2か月は、漁業者、漁協ともに大破した養殖小割や斃死魚の処理に追われました。

その後、須崎市は国の激甚災害の地区指定を受けました(平成23年8月4日付け官報)。平成23年9月時点では、規模は津波発生以前には及ばないものの、養殖業者の多くが施設を復旧したり、稚魚を導入するなど、養殖業を再開しております。さらに、漁業者、漁協、行政が一丸となり、養殖施設災害復旧事業への申請に向けて作業を進めているところです。筆者は、当地区の担当普及員として、微力ではありますが野見湾養殖業の発展のために寄与していきたいと決意を新たに、日々普及活動に励んでおります。1日でも早く野見湾に以前の活気が戻ることを願ってやみません。